

[総括討論]

櫻井里穂（広島大学教育開発国際協力研究センター准教授）

非常に活発な議論で、まだまだ時間が許す限り続けたいところですが、時間に限りがございますので次に進ませて頂きたいと思います。次は総括討論として、これまでの討論や会場の皆様のご意見を踏まえまして討論していただきたいと思います。総括討論と申しましても、このフォーラムは自由な意見交換の場でございますので、結論を導くことが目的ではないという事をご理解頂けたら有難いと思います。従いまして、本日ご登壇頂きました基調講演の先生方、及びパネリストの皆様方に、短いですがお一人3、4分程度で、本日のフォーラムの討論からEFAの教訓やポスト2015に向けての教育協力に関しまして特に重要だと思われた点についてお話し頂きたいと思います。エシェトゥ先生、ベナヴォット先生、石原先生、チェグ先生、山本先生、ラヤ先生、黒田先生の順で宜しくお願いいたします。

エシェトゥ・アスファウ（エチオピア教育省 計画・資源動員局長）

ありがとうございます。今日のこのフォーラムから、私はエチオピアの代表として、多くのことを学びました。今日学んだ中で最も大事なことの 하나가、ポスト2015年の問題は開発途上国だけではなく先進国の問題でもあるということです。私たちの問題はそれぞれ違いますが、共通の問題もあり、その点で協力できます。またエチオピアが直面している課題と同じ課題に他の途上国も直面しているということも、今日気付きました。例えば、ジェンダー格差はアフリカのほとんどの国々も抱える問題、途上国全般が抱える問題です。とにかく、エチオピアの経験をお伝えできただけでもよい機会でした。

今日私にとって最も印象的だったのは、政府の教育に対する貢献です。ほとんどの国々は、教育に年間予算の10%以下しか割り当てていないのに対し、エチオピアでは25%で、非常に高い数字です。私はエチオピアにいるときには、教育にそれほど多くの予算を取っているとは思っていませんでした。しかしエチオピアは非常に教育を重視していることがわかりました。それで国の予算の25%を割いています。実際の額は多くありません。日本のような先進国の教育予算はこの2倍から3倍はあるでしょう。エチオピアの教育予算は17億ドルにすぎません。国家予算全体が非常に少ないのですから、教育予算も少ないのです。予算の25%が教育予算というところが驚かれると思いますが、学校に行っている子どもたちの数からすると、まだまだ不足しています。人口の4分の1以上にも上る2600万人近くもの子どもたちが学校へ行っています。また民族も文化も多様で、すべての子どもたちに母国語で教えています。たやすくはないことは、おわかりいただけると思います。多額の費用がかかります。エチオピア経済にとって、大きな負担です。それでも実行したということが大事です。それぞれの子どもたちの権利を尊重しなければなりません。教育は権利です。それで実行したのです。成功しました。しかし非常に費用がかかります。国際社会のご協力もあって、できたのだと思います。感謝申し上げます。

アーロン・ベナヴォット（ユネスコ EFA グローバルモニタリングレポート ディレクター）

このフォーラムに様々な方々が参加されており、ポスト2015年の枠組みに大きな関心を寄せておられることに感銘を受けました。私もエチオピアのアスファウ先生にまったく同感ですが、ポスト2015年の枠組みにあるいくつかの主要なアイディアは南北共通の問題であり、日本など北の先進国にも当てはまることを、日本の皆様にご理解いただきたいと思います。特に、質や公正さに関する問題は大きな問題で、世界中の国々にとって重要です。質の問題にどのように取り組んだらよいかは、わかってきていますが、公正さの問題については、いまだにわからない点が多いと思います。

最近では、国家間の格差だけでなく、特に国内の格差にどのように取り組めばよいかという問題が出てきています。最も困窮している人々、最も恵まれていない人々、機会のない人々に教育を提供するため、地域社会も新しいプログラムや様々な取組みを模索しなければならないと思います。それについては、様々な例や様々な場所から教訓を学ぶことができます。また公正さを計るデータ・ツールやモニタ

リング・ツールなどのツールが必要です。この点については、EFA のモニタリング枠組みではあまり明らかにされていないので、ポスト 2015 年の目標や指標では、これまでよりもずっと公正さの要素を強く打ち出してほしいと願っています。

もう一つ、資金調達について述べたいと思います。様々なことが資金調達については言えますが、ここでは今日のまとめとして、教育費のほとんどは教員の給与に使われていることを指摘したいと思います。政府の教育予算のうち、80%から 85%は教員の給与です。革新的な資金調達メカニズムは、枝葉な部分では助けになりますが、教育費の中心的な部分、最も重要な部分である教員給与を支援することにはならないのではないか、という課題があります。教員にきちんとした給与を支払い、昇給の機会を提供できるように努力している肝心の部分は、それには頼れないのではないのでしょうか。この点も留意しなければなりません。

最後に、今日の話には出てこなかったことについて述べさせてください。教育分野には、善人、善意の人々だけが関わっていると私たちは思いますが、様々な汚職が広がっています。この問題も今後は取り上げなければならないと思います。初等教育でも中等教育でも、高等教育ですら、教育界で様々な汚職が蔓延しています。資金調達だけでなく多くの面で広まっている汚職に立ち向かうにはどうすればよいか、対策をとる必要があります。今日このように皆様とお話する機会を得てうれしく思います。

石原伸一（国際協力機構（JICA）人間開発部次長）

本日は雨の中お越し下さいましてありがとうございます。皆さんと良いディスカッションが出来たと思います。最後に私の方からは3つ申し上げたいと思います。1つ目は教育の価値を再確認しました。その中でクオリティも非常に大切なのですがクオリティとエクイティとのバランスと言いますか、エリートを作るだけでなく、皆がエクイティの形で学んでいく教育がこれから求められていますし、JICA としても協力をする際には常にそれを考えながら取り組んでいきたいと思います。教育の価値で、学んで楽しいとか面白いという価値とそれからもう1つは先ほど申し上げましたが平和や多様性を求めていくという部分の教育の価値もしっかりと伝えていかなければならないと思います。2つ目は、教育を超えてと言いますか、例えば SDG について先程ベナヴォット先生が” sustainable development begins with education” とおっしゃったように、教育が他のセクターにどの様に貢献できるのかということが開発効果を考える際に大切なので、セクターを超えて、そして発想を変えてもっと柔軟に、より多くのアイデアが生まれるような形でこれからも協力をしていきたいと思います。最後に、それぞれがそれぞれの立場でしっかりと仕事をして、それからプロフェッショナルなネットワーク、これにはグローバルなネットワークもあればリージョナルなネットワークもあるわけですが、こうしたネットワークをもってつながり合って協力していくことがより大事になってくると思います。グローバルでなければできないことはグローバルな機関がやる仕事ですし、研究者には研究者として地域に入っていて深くできることがありますし、JICA には JICA の役割も強みもありますし、それぞれがしっかりと役割を果たし、ネットワークを活用し、議論をしながらしっかりとポスト 2015 課題に取り組んでいきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

ファトゥマ・チェゲ（ケニヤッタ大学 教育学部長）

一日参加くださった皆様に感謝申し上げます。皆様からのご意見やご質問によって、私たちもさらに深く考えることができました。ポスト 2015 年の持続可能な開発目標の中にある「持続可能性」のためには、国際的な目標だけを見るのではなく、相互補完的なアプローチが必要だと思います。各地域が、どのように自分たちの地域に合わせて目標の実現を目指すのか、各国政府がそれらの目標をどのように解釈してジェンダーや教育政策を立案するのかを、見ていく必要があります。また私たちは、学校の管理職や校長をはじめとする教育のリーダーたちが、どのようにこれらの政策を解釈して、あらゆる面で学校を公正な場にし、ジェンダーの公正を確保していくのかということも大切です。

私は、教育の管理職やリーダー、校長や教員のトップらは、これらジェンダー公正の政策を実施する

上で、実際の責任を担っていると思います。彼らには、教育者や教員たちがきちんとした能力を身につけられるように、研修や場合によっては再教育を実施する責任があります。これらの目標は、地方の現場で持続されなければ、続かないからです。地方の現場にて、新しい方法で地域社会や親の協力も得られなければ、続きません。また、パートナーシップや資金調達のパートナーシップについても討議しました。質的に、もう少しその点を掘り下げて、親やコミュニティに参加してもらう方法を検討する必要があります。特定された目標を達成し継続することを、親やコミュニティにも自分の問題として参加してもらう必要があります。このような活動は、いくつかの国々ですで行われており、民間が教育費を出しているだけでなく、政府を援助して学校を建設したり、企業に実習生を受け入れ仕事のスキルを身に付けるトレーニングを行ったりしています。子どもたちが学校を卒業した後、次の段階に進む前に、これらの企業は経験をつむ場を提供しています。このようなパートナーシップでは、企業は資金を出していないかもしれませんが、若い人々に仕事のスキルや仕事にきちんと取り組む姿勢を学ぶ機会を提供しています。このようなパートナーシップは推進すべきだと思います。また、グローバルなレベルで様々な目標の達成状況をモニター、評価するとき、簡単に理解でき、かつ諸機関が簡単にわかりやすくモニター・評価できる方法が必要です。例えば、学校でジェンダー平等を実現するためにジェンダーにどのように配慮しているかは、学校や諸機関の校風や社風になるべきで、地域社会など様々なパートナーの参加が必要です。学習者も、自分たちが何をしているか、教育を受けることによって、どこに向かおうとしているかを理解できるような教育を受けなくてはなりません。従って、より革新的な方略を考え、また、いまだに学校に通えていない子どもたちのための代替教育を考えなくてはなりません。これらの非就学児童は何百万人もいます。彼らが学び続けられるように、代替教育を考えなければなりません。これはポスト 2015 のグローバル目標の内の 1 つである生涯学習にも関連してきます。どの時点で学校をやめても学習の場があるように、政府は学校に行っていない何百万人もの子どもたちに代替教育の場を提供することを検討すべきです。ありがとうございました。

バルディン・山本百合子（ブラジル・サンカルロス連邦大学教授）

今回のフォーラムは非常に重要な内容で本当に学ぶことが多く心から感謝しております。限られた時間の中ですので、私の職業柄、教師教育の視点に絞ってのお話になりましたけど、色々なことがこのフォーラムでは議論されて、それについて私の携わっているプロジェクトの資料からももっともお話することがあったことを思うとちょっと残念に思いますが、それはまたこの次の機会にしたいと思います。私が締めくくりとしてお話ししたいと思うのは、これからのポスト 2015 の次の課題として、このグローバルモニタリングレポートからも分かるように、やはり量的だけでなく質的なアセスメントが重要な課題となり国際的にも協力していかなければならないという事です、短いですけどこれで終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

ルネ・ラヤ（アジア南太平洋基礎・成人教育協議会 主任政策アナリスト）

このような機会をいただき、非常に実り多い討議に参加できたことを、主催者に感謝いたします。このようなフォーラムはぜひ継続すべきです。教育分野の多くの問題に、声を一つにして取り組むためには、大学、政府、市民団体、民間が意見を交換することは非常に重要です。皆様のご尽力ですばらしい会になりました。このような交流の場が続き、今後も発展することを希望します。私たちの協議会では、ポスト 2015 年の教育開発課題として、アクセスの拡大、質、公正、資金調達を入れるように求めています。すべての人々に質の高い教育や生涯学習を提供するためには、これらは非常に重要な問題であり懸念だと考えます。このフォーラムに参加し、公正さや質に関する理解、特にコミュニティや学校教員のエンパワメントのための教員開発に関する理解が深まりました。また公正さ、特に学校や教育へのアクセスの平等だけでなく、ジェンダー平等を実現することに焦点が当たりましたが、アクセスだけでなく、教育の成果という点からも、男女の不平等を埋めるためには、ジェンダーの視点が欠かせません。

このフォーラムから学んだこととして、教育や学びを仕事だけでなく、人生や地域社会の視点から考

えることです。私たちはいろいろな役割を果たしています。教育や学びは、経済的な役割に役立つだけではありません。私たちは家族の一員であり、社会の一員でもあります。私たちは保健、政治活動、社会動員など、様々な役割を果たしています。教育も全体的かつ生涯学習の視点からの枠組みを持つことが非常に重要です。ありがとうございました。

黒田一雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授/国際教育協力研究所所長）

ありがとうございました。今日の議論の中で、もしくはこれまでのポスト 2015 の議論に関わってきて私が考えていることを最後に簡単にお話させて頂きたいと思います。先ず最初に、EFA は達成されていないという事です。今日のベナヴォット先生の発表でもありましたように、世界では 5,700 万人、実は速報値では 5,900 万人くらいの子も達が学校に行けていないという状況が今も続いています。ですから、ポスト EFA だとかポスト 2015 というような言い方をしますが、EFA はまだ達成されていないので、これからも最も重要な部分ではないかと思えます。それから第 2 番目に、今日のお話の中でとても面白かったのは、格差についての様々な考えが提示されたという事です。チェゲ先生がジェンダーについて詳しく話し下さいましたが、その中にも様々な格差、また格差についての考え方についてのお話がありました。どうしてもこれまでの 15 年間のフレームワークはジェンダーに重きが置かれていました。それは大変重要なことではありますが、例えば、障がい、エスニック・マイノリティ、どこに住んでいるのか、貧困層と豊かな人たちの間にある教育の格差であるとか、様々な格差があってそれらが複合的に合わさって格差を生んでいるという状況があると思えます。そこをもっと総合的にやっていかないといけないというのが、2015 年以降の枠組みの重要な点だと考えています。そのためには、3 目になりますが、ファイナンス・ギャップを何とかしていかないといけないということです。これまでの 15 年間にも、その前のはジョムティエンから 2000 年にかけても議論されてきたことですが、どうしても国際社会が一丸となってこれだけ頑張ってきて大きなファイナンス・ギャップはあって EFA は達成できなかったわけでありす。

官民連携という可能性について、今日も PPP の可能性についても議論がありました。勿論、これからの在り方として考えていかなければならなりませんし、特に垂直的な関係から水平的な関係に先進国と途上国の関係が移っていく中で、民間の活力は非常に重要だと考えます。しかし、その一方で、今日の議論の中で、政府の役割、もしくは政府の義務とは何なのかということがありましたが、政府の役割や義務を明確にしつつ民間の力を借りていくという事がこれから望まれることなのだと考えました。また、教育の質は 2015 年以降の枠組みの中で最も重要だと言われています。教育の量だけでなく質を考えなくてはならないというのも実は 90 年代から話されていたわけですが、面白い実証研究がたくさんありまして、例えば経済成長は教育の量の拡大ではなくて教育の質の向上によって達成されるということが明確になってきています。そういう意味では、とにかく教育の質を向上させるということにフォーカスしていかなくてはなりません。それから、特にアウトカム、アウトプットの部分で、つまりは学業成績という形で見ていく必要があるというのが恐らく 2015 年以降の大きな流れだと思いますし、それ自体はとても大切なことなのですが、多分もっと重要と言いますか、これはパラダイムシフトなのだと思いますが、2015 年以降に大きく取り上げられることとして、何のための教育であるか、何を教育するか、つまりは教育の中身について、より議論が求められるようになりました。残念ながらこれは 2000 年の議論の中には入りませんでした。例えば平和ということについて 2001 年以降に世界の同時多発テロや復興支援といったコンテキストの中で、平和のための教育というものを実は国際社会は強く意識したのですが、2000 年の枠組みの中には明示的に目標には入りませんでした。だからこそ、2015 年の枠組みの中には sustainability (持続性) という考え方や global citizenship education (地球市民教育)、そして culture of peace (平和の文化) といったことが、今朝にベナヴォット先生がおっしゃった新しい方向性の中に位置づけられるようになりました。これが 9 月にニューヨークで通るかどうかはまだ分からないという事なのですが、多分 2015 年以降、本当に国際社会はなぜ一丸となって教育を進めていくのかを問うた時に、何を教育するのか、どんな社会を理想として教育を行っていくべきな

のかということ置いては議論やフレームワークを作ることはできないと考えます。実は今までのフレームワークは途上国にフォーカスをした開発目標だったわけなのですが、これからはユニバーサル目標を目指すべきだという議論が国際社会では中心になっていると思います。全ての国々、途上国だけでなく先進国も合わせて、一緒に教育という目標を掲げていくことが重要になってきています。昔は、教育は1国の問題として考えられていたこともありましたが、これだけグローバルが進んだ社会では、グローバル・アジェンダとして教育を考えていくようになり、それが2015年以降より一層進んでいくと思います。2015年以降に日本に何ができるのかということ、私たちは考えなくてはなりません。そのためのフォーラムだったかと思えますし、色々な所でこの議論は進んでいます。2015年の枠組み作りインプットしていくという事はこれまでも行われていて、これからインチョン、ニューヨークでもやっていくわけですが、この枠組みは大体見えてきました。しかし、当然ですけれどこれで終わりではないわけです。2015年以降の枠組みが見えたところで、そこから日本は何ができるのか、どうやって推進していくのか、という事について、また世界中で議論していかなければいけません。その中で日本も新しい教育協力政策を作り始めなければなりません。今、文部科学省で国際協力推進懇談会というものが行われていまして、また外務省でもこれまで2度小泉政権や管政権の時に教育協力政策を出しているのですが、新しい政策作りが進んでいくことと思います。また、この様にここにNGOの方々や研究者の方々がどんどん一緒になってこういった議論を始めているのが現状です。2015年以降にどのような社会を作っていくのか、そしてその中で教育はどんな役割を果たし得るのかについて議論していくのは実に楽しみなことだと思いますし、これからも続けていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

最後に、ここからは今は外の天気の状態が分からず、もしかしたら大雪かもしれませんが、皆様、お帰りの際には、どうぞお気をつけてお帰りになって下さい。皆様にはこのような悪天候の中、最後まで残って議論に参加して頂きまして、感謝を申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

櫻井里穂（広島大学教育開発国際協力研究センター（CICE）准教授）

黒田先生、まとめて下さり、どうもありがとうございました。そしてご登壇者の方々もどうもありがとうございました。黒田先生の方で本日の討議の要点を非常に簡潔にまとめて下さいましたので、司会進行役の私の方からは今回のフォーラムを通じて感じたことを1点だけお話させて頂きたいと思えます。教育社会学者の荻谷剛彦氏によりますと、江戸時代に庶民の子ども達が通っていたとされる寺子屋の勉強風景とは、今の学校の教室の風景とは異なり、寺子と呼ばれる子どもたちが師匠と呼ばれる先生に必ずしも向かい合って画一的に勉強を教わっていたわけではなく、それぞれの進度に合わせて、字を習ったり本を読んだり、また時にはお互いに学び合うという姿勢があったと書かれてございます。これは、本日ポスト2015の教育協力の姿勢に関しまして、度々出て参りました垂直的から水平的な姿勢、文化的多様性を認め合ったグローバル・アジェンダに通じるものもあるのではないかという気がいたします。そしてそのために必要なのも本フォーラムが目指すところの、こちらの裏表紙に書いてございます、文化多様性を認めた自助努力支援にあるのかもしれませんが、冒頭に申し上げましたが、このフォーラムは結論を出すことを目的とはしておりません。本日のフォーラムが皆様に何らかの示唆を提供する機会となることができましたとしましたなら、一主催団体として、大変光栄に存じます。

それでは時間となりましたので、エシェトゥ先生、ベナヴォット先生、石原先生、チェグ先生、山本先生、ラヤ先生、黒田先生に今一度、感謝の気持ちを込めまして拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。以上をもちまして、第12回国際教育協力日本フォーラムのプログラムが全て終了いたしました。これで今年のフォーラムを終えさせて頂きますが、主催4団体に代わりまして、基調講演者及びパネリストの皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございます。またこのフォーラムをご後援頂きましたJICAさん、そして今日終日、素晴らしい通訳をして下さいました通訳の方々にもお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。また、こちらの主催者の一団体として本日のフォーラムをお手伝い頂きましたインターンの学生、裏方のお仕事をして下さった主催団体の方々にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。そして本フォーラムは何と言っても皆様のご協力無しに

は成し遂げられません。今日1日ご協力頂き、議論を盛り上げて下さいました会場の皆様にお礼を申し上げて拍手で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。それではこれもちまして、第12回国際教育協力日本フォーラムを終わらせて頂きます。本日はどうもありがとうございました。